

図 書 室

生研の蔵書数は、昭和62年度末で142,198冊で、10年前の123,113冊と比べて2万冊弱、16%の増加となっている。図書室関連の床面積は10年前と全く変わらない。書庫スペースの逼迫は生研だけの問題ではないにせよ、相当に深刻である。昭和43年に、西千葉地区に保存書庫を設けて以来、何とか急場をしのいではきているが、すでに、麻布地区、西千葉地区ともにほぼ満杯に近付いており、近い将来に新たな対策が必要となる状況にある。

図書室の職員数は、昭和55年度までは掛長を含めて7名であったが、昭和56年以降は退職者の後任が定員削減の影響で補充できず、6名となり現在に至っている。図書室の運営の要点や共通図書の選定などは、図書委員会の議を経て決定される。図書委員会の構成は各部2名、計10名の委員と、教授総会選出の委員長1名となっている。

洋雑誌の値上がりの問題は依然として大きく、円の為替レートの上昇を上まわった。このため、この昭和53年から63年迄の10年間を通じて、全体としては購入洋雑誌点数は減少の傾向をたどった。

表—1 Chemical Abstractの価格推移

年度	定 価*	購入価格
	\$	¥
昭和53	4,200 (100)	1,220,000 (100)
54	4,200 (100)	920,000 (75)
55	5,000 (119)	1,412,000 (116)
56	5,000 (119)	1,460,000 (120)
57	6,360 (151)	1,510,000 (124)
58	6,995 (167)	1,770,000 (145)
59	7,500 (179)	1,930,000 (158)
60	8,500 (202)	1,900,000 (156)
61	9,200 (219)	1,924,000 (158)
62	9,900 (236)	1,417,000 (116)

(* 大学向けはこの価格より割引がある)

表—1は一例としてChemical Abstractのドル定価と購入円価格とを対比して示したものである。ドル定価は10年間に2.36倍にも上昇したが、円での購入価格は昭和53年度を基準にすれば、昭和61年には1.58倍になっている。

この間、図書予算の推移は表—2に示される通りとなっており、図書室雑誌予算（大部分が洋雑誌購入費）はあまり増えていない。昭和53年度比で昭和

表—2 図書予算の推移 (単位：千円)

年 度	図 書 室			研 究 部		
	単行書	雑 誌	合 計	単行書	雑 誌	合 計
昭和53年度	2,264	12,121	14,385	9,860	7,719	17,579
昭和54年度	2,231	11,258	13,489	11,122	7,520	18,642
昭和55年度	2,392	15,789	18,181	12,432	8,628	21,060
昭和56年度	1,509	16,024	17,533	15,058	12,545	27,603
昭和57年度	1,750	15,710	17,460	16,115	13,010	29,125
昭和58年度	1,432	16,744	18,176	18,172	16,332	34,504
昭和59年度	1,150	14,804	15,954	20,317	15,486	35,803
昭和60年度	1,028	15,601	16,629	18,445	17,804	36,249
昭和61年度	912	16,137	17,049	14,941	17,057	31,998
昭和62年度	784	15,443	17,049	14,360	16,038	31,398

58年度1.38であったのが最高で、昭和62年度には1.27倍に過ぎず、10年間の伸びはわずか27%である。これに対して研究部の雑誌購入費（これも大部分が洋雑誌購入費）はこれより大幅に増加しており、10年間の伸びは、2.1倍である。

表—3 購入雑誌タイトル数の推移

年度	和		計	洋		計	総 計
	図書室	研究部		図書室	研究部		
昭和53	24	1	25	235	178	413	438
54	25	1	26	239	189	428	454
55	29	0	29	251	177	428	457
56	29	0	29	233	189	422	451
57	32	0	32	198	184	382	414
58	19	0	19	170	177	347	366
59	18	1	19	154	179	333	352
60	17	1	18	146	179	325	343
61	19	1	20	156	164	320	340
62	19	1	20	158	164	322	342

表—3に年度毎の雑誌の購入点数が示されている。図書室の購入する洋雑誌は概して減少傾向にあり、この10年間にタイトル数で2/3に減少した。一方で研究部購入の洋雑誌タイトル数はほぼ1割の減にとどまっている。つまり、図書室予算で購入し切れなくなった雑誌を、研究部で懸命に買い支えているという図式になっているようである。

今後、過去10年程の大幅な円高の進行は期待できそうにないので、洋雑誌購入に伴う情勢ははるかに厳くなるものと想像される。他部局との共同利用も含めてかなり抜本的な改革が必要となるかもしれない。またこれまでにも再々論じられた洋書輸入業者、代理店の独占的な価格維持体制の打破にも真剣に取り組まなければならぬ。 (越正毅 記)